

序章 「キラキラネーム」という名のミステリー

9

『枕草子』と「苺苺苺」と 「光宙」くんと の 出合い
多数派は「読めない名前」
日本語が背負った宿命の落とし穴 キラキラネーム現象の核心にあるもの 現象の向
こうを見る 旅 に

第一章 なんでもありの「キラキラ界」

22

読めない個性的な名前 あなたは読めますか？ 「心」は「ぴゅあ」ということで
実在はホントにほんと？ 「光宙」は都市伝説か 謎の「勘解由小路光宙」 「悪魔」
くん騒動との違い 読めなくてあたりまえ キラキラネームの基本形 二〇一二年
生まれの新生児の名前 音の響きを優先 同音異字のバリエーション

第二章 なぜ読みにくい命名をするのか

49

暴走万葉仮名の意味するところ キラキラ親Ⅱ元ヤンというイメージ フツの親た
ちの不可解な選択 世評なんて気にしない？ 違和感の正体 キラキラネームの

“方程式” その当て字はセーアかアウトか？ 揺らぐ判定基準 名づけの迷い道
多数派の「疑似キラキラネーム」 名づけの漢字の“常識”とは？

第三章 無理読みは伝統だった

79

懐の深い日本語 名乗りという無理読み 「美香」が変則読みで「はるか」に 名
づけの漢字と読み 神様、読めません！ 「明子」は「あきこ」ではない 歴史上
の人物たちの大胆な名乗り 「徳川慶喜」の呼び方 からみ合う姓・氏・苗字 成
長とともに変わる名前 織田信長の子供は「奇妙」 兼好法師の怒り 江戸時代に
も難読名乗りブーム 本居宣長の門下生の難読名 宣長の「和子」批判

第四章 言葉がつくったやっしい状況

108

名づけの深い森 「声の文化」と「文字の文化」 文字のなかった言葉の幸はふ国
言葉信仰のDNA 邪神を鎮める言葉のパワー 知られてはならない名前 人格を
貶める醜名 漢字という容器に入った言葉 やまとことばの言葉 vs. 漢字の言葉
女が名前を告げるとき 『源氏物語』と風俗嬢のえにし 「千尋」も名前を奪われた

ビジネスシーンの「忌み名」 この世で一番短い呪 言霊による「祈り」と「呪い」

第五章 「読めない名前」の近代史

138

「読まない名前」と「読めない名前」 人名にも明治維新が起こった 名前のデパート、

伊藤博文 西郷隆盛は間違えから生じた名!? 難読苗字も続出 明治期のすさまじ

い造語力 国名は万葉仮名で 衝撃! 近代の名乗りワールド 編者もうんざり

戦前の「キラキラネーム」たち 漢字で書いた洋名 偉人たちの奇抜な名づけ 漢

字で書く豊かさと煩雑さ

第六章 明治期のエリートはなぜ珍名を好んだのか

166

似て非なる、キラキラネームと難読名 キラキラネーム急増の漢字事情 森鷗外の名

づけの正体 明治期における重厚な漢字遣い そもそも漢字はハイブロー 背景に

あった漢籍の素養 明治の庶民女性のひらがな・カタカナ名 通用しなくなった漢字

の「常識」 権威の座から失墜した漢字 さまよえる国語国字問題 当用漢字によ

る漢字制限 「戀」のとまどい 「決別」と「秘訣」と「決起」の不合理 「お母さ

ん」と書いてはいけない!? 悠久の漢字の歴史との断絶

第七章 ついに「断層」が見えてきた

200

玉音放送がわからなかったわけ 子の名は常用平易な文字とせよ 「稔」も「弘」も
名づけ禁止!? 当用漢字の浸透 移りゆく時代の評価 世代で異なる漢字の位置づ
け 当用漢字前と隔絶する「第三世代」 「第三世代」団塊ジュニアの漢字観 団
塊ジュニアの名づけ キラキラネームを誘発したもの 書けなくても漢字変換できる
時代 人に愛される意で「優」と名づけたい!? 「漢字」から「感字」へ 外国人
の変な漢字タトゥーを笑えない 「漢和辞典」的な引力の意味

終章 「感字」、悔るべからず

235

予想だにしなかった迂遠な旅 迷い込んだ言語の深い森 キラキラネームは「炭
鉱のカナリア」だった 「漢字」を「感字」にしてはいけない